

私は、あなたがたがキリスト・イエスにあって与えられた神の恵みのゆえに、いつも私の神に感謝しています。あなたがたはキリストにあって、言葉といい、知識といい、すべての点で豊かにされたからです。こうして、キリストについての証しがあなたがたの間で確かなものとなったので、その結果、あなたがたはどんな賜物にも欠けるところがなく、私たちの主イエス・キリストが現れるのを待ち望んでいます。主も、あなたがたを最後までしっかり支えて、私たちの主イエス・キリストの日に、非の打ちどころない者にしてください。神は真実な方です。この方によって、あなたがたは神の子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに招き入れられたのです。（Iコリント1：4～9）

パウロは、コリント教会の信徒たちへ深い愛と信頼の言葉を書き送っている。イエス・キリストを通して与えられた神の恵みを感謝している。あなたがたはキリストにあって言葉、知識、全ての点で豊かにされているからである。キリストについての証しが確かなものなので、賜物に欠けることなく、キリストの再臨を待ち望んでいる。キリストは最後まで支えて、イエス・キリストが再臨される日まで、非の打ちどころがない者にしてください。神は真実な方で、この方によって神の子とされ、イエス・キリストとの交わりに招き入れられている。パウロは、コリント教会の信徒たちが全てに満たされ、終末の日まで信仰の歩みを続けていると絶賛している。こんな美しい愛と信頼の言葉があるであろうか。

ところが、本文を読んでみると、コリント教会はパウロにとって悩ましい教会であったことが書かれている。パウロは第二伝道旅行においてアテネからコリントの町に南下して来た。パウロはこの町で、ある夜、幻の中で、主イエスの「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。私はあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はいない。この町には、私の民が大勢いるからだ（使徒言行録18：9b～10）」という声を聞いた。パウロにとっては、1年半の比較的長い期間、滞在して伝道活動を続けている。

コリントの町は東西に良い港があり、交流の要所として多くの物資が運ばれ、経済的には豊かな町であった。しかし反面、コリントの町は周りから「退廃の町」と評される、荒廃した町であった。町の豊かな者たちは富を、学識ある者は知恵を誇り、貧しい者たち、無学な者たちを蔑んだ。人間の欲望が町を覆い、性に関する倫理も乱れていた。パウロが伝道して建てたコリント教会は様々な人が集まっていたが、町の荒廃がそのまま持ち込まれ、福音に反する問題が次々と起こった。主イエスから、荒廃した町であったので福音を必要としている民が大勢いる、語り続けよと言われたのではないか。パウロが去った後、それらの問題が表面化し、彼は言葉を尽くし福音に生きるように教え諭している。

パウロとコリント教会は悩ましい関係であったが、Iコリント書の初めは全く問題がないような愛と信頼の言葉で書き始めている。しかしこれが、パウロの牧会姿勢である。福音に反する問題があるからと、嘆いて叱り、非難するだけでは、キリストの教会は形成されない。愛と信頼の言葉を語る中から、福音に向かって生きる信徒たちが育ってくる。このような忍耐は並大抵ではないが、「キリストの日」、即ち、キリストの再臨の日を望むがゆえに、愛と信頼の言葉が真実となって迫ってくる。終末信仰は、今を、肯定的に生きることへと向かわせるのである。コリント書は、生身の人間が呻き、争う様がリアルに描き出され、そこに働く、福音の真実が説かれている。